

ホーリネスと女性

日本のホーリネスに生きる女性たちへの言葉

フロイド・カニングハム

女性、ホーリネスとみ言葉

福音は世界の秩序をくつがえす。もっとも小さいものももっとも偉大であり、後の者が先になり、心の貧しいものが幸いであるからだ。福音の平等主義を述べている言葉はガラテヤ 3:28 の言葉「もはや、ユダヤ人もギリシャ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは、皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。」テモテに対しては、「神と人との間の仲保者は一人であり、それは人としてのイエスキリストです。」と言いました。パウロは同じ手紙の中で、教会では女性は黙っているようにと教えているのは、それは、当時の倫理に関わるものであり、特定の特定の時代にのみ適用されるものです。一方、パウロがガラテヤに書き送った教えは、神の国の倫理であり、すべての時代、場所において適用されるものです。目標はキリストにあって一つとなることです。神学的に言えば、すべての時代にすべての場所で神の御国が理想のレベルに達するとは限らないのですが、重要なことは、教会は、すべての時代にすべての場所で、神の御国において人の平等を理想のレベルに届くように意図的な努力をしているということです。私たちウェスレー派の人々は、この点において楽観的に見えています。御国は私たちの神の恵みへの応答を通して実現すると考えているからです。つまり、山上の説教も、神の国の倫理も、いつか別のとき、別の場所のためのものでなく、今、この場所に対して教えられているものであり、キリストは、神の愛はすべての人に無差別に注がれていることを、聖霊の力によって、もっと世の人々に知らせることを求めておられるのです。

女性、ホーリネスと歴史

J ウェスレーの下、女性はクラスミーティングのリードや説教をする機会が与えられました。彼は自分の母親が台所で聖書研究を指導するのを見ていました。母スザンナが生きている間、彼は個人的なことだけでなく神学に関することも母に相談しています。彼が書いた手紙の中には、女性特有の強さや弱さにたいして敏感であった女性たちに書かれたものが数多くあります。女性が女性だけのクラスミーティングのリードをしました。1771年にはメリー・ボサンクエットとサラ・クロスビーがイギリスのヨークシャーで祈祷会を持ったり、説教をしたりしていました。彼らは説教ハウスと呼ばれる場所で説教をしていましたが、これにはある人々は反感を抱きました。ボサンクエットはウェスレーに直接手紙を書いて、自分には男性説教者と同じ、特別な召命があると訴えています。クロスビーは1751年からクラスのリーダーを務めました。彼女の夫が彼女から去っていったので、彼女は自分の時間を貧しい人のためにささげました。1771年までには、ウェスレーの目に、クロスビーには特別な賜物があることが明らかになり、彼女は巡回伝道師として、時にはウェスレーとともに伝道しました。ウェスレーは、メソジスト教会と英国国教会との軋轢を引き起こしたくはなかったのですが、女性が説教することを容認していました。

アメリカでは、メソジスト教会は英国国教会の顔色を伺う必要はありませんでした。女性は大胆な働きをして女性の弱さを忘れさせるほどでした。彼女たちは男性以上に大きな力があると思われていました。初期の時代のアメリカでは、女性が説教者として優れていたために、このような状況も受け入れられました。しかし、メソジスト教会やバプテスト教会が成長するにつれて、教会はこの状況を恥と思い、拒否するようになり、説教者や牧師は男性でなければならないと考えるようになります。

それと同じ時期、メソジスト教会は、もうひとつの伝統を拒否するようになります。それは完全な聖化をラジカルに説教することへの拒否です。19世紀半ばのアメリカで、2つの問題が生じていました。1853年9月15日ニューヨーク州、サウスバトラーに集まった人々が教会の歴史を変えました。28歳の女性アントワネット・ブラウンに按手礼を授けたのです。ウェスレー派メソジスト教会の牧師ルーサー・リーが「福音を説教する女性の権利」と題する説教をしました。彼女の按手礼を授けた人々はホーリネス運動と密接な関係にある人々でした。

フィービー・パーマーはメソジストの中で、ホーリネスを説く最も優秀な人物であると同時に、女性が按手を受けることを擁護していました。ニューヨーク市に住む平信徒で医者妻であったパーマーは、そのまま、人々から尊敬される生き方ができる人物でした。彼女は、二人の幼い子どもを亡くした後、全き聖化を経験しました。彼女は神から「あなたは自分の夫と子どもを偶像にしている。むしろ神を主としなさい。」という声を聞いたのです。彼女は自分自身を神に捧げ、賜物を清める約束を主張し、全き聖化の体験を受けました。J.ウェスレー以上に、パーマーは全き聖化と聖霊の力を関連付けました。聖霊のバプテスマは、ちょうどペンテコステの時のように、聖める力がともないました。その体験はすぐにも起こりうるものというイメージでした。この体験を得るために、長く、苦闘する必要はありませんでした。聖霊が、一瞬のうちに働いて信者にバプテスマを施すのです。ペンテコステの日に、ペテロが引用したヨエル書の言葉は、「終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ。すると、あなたがたの息子や娘は預言する。」という言葉でした。(使徒2:17-18) 聖霊は、ある明確な目的のために、一人一人にバプテスマを施します。男性も女性も、その目的は、キリスト・イエスが私たちを捕らえてくださったように私たちも捕らえるためです。(ピリピ3:12) このことに基づいて、パーマーは、聖霊の力を受けた自分自身、その有益性について教えました。女性にとって、全き聖化は神の国において新しい、より中心的な役割を担う可能性をもたらしました。このような意味で、パーマーは様々な働きに導かれました。按手は受けていませんでしたが、彼女は、アメリカ、イギリス、カナダで、キャンプミーティングやホーリネスの集いにおける影響力のあるスピーカーになりました。彼女はホーリネスに関わる定期刊行物の編集に携わり、自分の経験に基づいて、全き聖化へのより近い道を強調する書物を著しました。自宅では火曜日の午後に祈祷会を持っていましたが、そこで、多くの人が聖化を体験しました。

彼女が関わった社会問題の中に、ニューヨーク市に住む移民やホームレスの問題がありました。彼女自身は奴隷制度の即時撤廃を求める運動に対しては態度を明らかにしませんでした。女性と奴隷に共通する苦しみを感取っていました。南北戦争後、多くのホーリネスの女性たちは、アメリカ黒人の惨状に対する働きを続けていました。

ウェスレー派の人々は女性が教職に就くことには慎重な姿勢をとっていました。より古いメソジストの教団では20世紀半ばまで女性への按手は行っていませんでした。ウェスレー派の女性は、女性に関わる社会改革に積極的に携わるようになりました。ウェスレー派によって設立されたカレッジは最初の男女共学校となりました。また、ホーリネスの人々は未婚の母や子供のための施設を作り、とくにアルコールの問題の解決に取り組みました。

メソジストの女性によって始められた禁酒運動はアルコールが女性や子供に大きな影響を与えているとみなしていました。メソジストで、19世紀後半のキリスト教女性禁酒協会会長であったフランセス・ウィラードは禁酒こそが、さまざまな社会悪の改善や、女性の参政権など他の社会改革に必要なものと考えていました。

19世紀に、別のホーリネス団体が設立された時には、指導者の中に女性が含まれていました。そして、女性への按手も行われていました。古い教団では、女性の按手が実現するのは数十年後のことですが、多くのホーリネスの教団では、この点についての議論はあまりありませんでした。彼らは、神が女性にも説教や牧会の賜物を与えていることが明らかだと考えていたからです。未婚の者も・既婚の者も、夫のサポートがある者もない者も、多くの女性が召命を感じて、さまざまなフルタイムのミニストリーに加わりました。伝道者、牧会者、教師、作家、弱者へのケアなど。

宣教師としての働きは、自分の国ではできない自己実現の場となりました。宣教地においては、女性も、説教し、教え、また、牧師になることもできました。時には、女性たちが教会の監督や学校の管理者にもなっていました。女性宣教師たちは、派遣地の文化において苦しむ女性たちのためだけでなく、社会から見捨てられた人々のためにも働きました。彼女たちは、男性宣教師たちが入ることのできない人々のところまで入って行きました。たとえば、インドの女性や、中国の文盲の老婦人たちのところへ。彼女たちは男性宣教師たち以上に熱心に、地元の教会の成長のために働きました。

欧米の女性宣教師たちが中国に来てひどく驚いたのは、纏足の習慣で、残酷で非人間的なものだと感じました。ミッションスクールでは、少女たちは学校に入ることを希望するなら、足に巻かれた布を解くように言われました。少女たちが教育を受けるという事実自体、キリスト教が中国や世界にもたらしたものです。その結果、中国の教会の働きに多くの女性が加わるようになりました。

文化人類学者ルースベネディクトによると、日本に設立されたあるミッションスクールでは、女性たちが外国語を読めることができなければならないと主張しました。クリスチャンは、女性が信仰の大切なパートナーであるとみなしました。

ホーリネス運動の中では、女性たちは熱心に奉仕しました。救世軍はホーリネス運動を具体的に

進めて、男性だけでなく女性も任務に派遣しました。1904年から1934年まで、創設者ウィリアム・ブースの娘であるエヴァンジェリン・ブースは、アメリカの救世軍全体を指揮する立場についていました。

日本では、救世軍の働きの多くが、直接あるいは間接的に、女性の地位向上に貢献しました。売春を廃止する運動を行いました。19世紀の日本は、飢饉や生活苦のために、地方の家族は幼児を殺したり、家族を養うために娘を売りました。殺されることと比べれば、売春させることはまだ人間的といえました。当時の少女にとっては売春宿に売られることは一種の親孝行と見られていましたが、クリスチャンたちは激怒しました。救世軍は政府に売春を法律で禁止するよう圧力をかけました。1900年、救世軍の働きかけの結果、日本の法廷において「自由廃業」の原則が決定しました。救世軍は、売春をやめた女性たちが以前の生活に戻るのを防ぐために、東京に施設とオフィスを設置しました。このことを通して救世軍の名が知れ渡ると同時に、売春宿を経営していた仏教徒たちの怒りを引き起こしました。救世軍は禁酒運動をも支持しました。

アメリカやイギリスと同様に、日本のキリスト教女性禁連盟は禁酒のほかにもさまざまな社会問題に取り組みました。たとえば、帝国議会に働きかけて未成年の喫煙禁止の法律制定をもたらしました。日本のYWCAもまた社会における女性の地位向上と人々の必要に応える働きに熱心に取り組みました。

日本のホーリネスグループの仲では、女性たちが指導的役割を演じました。レッチィ・カウマンは夫と中田重治とともにOMS創設に関わりました。その後、彼女はこの団体の宣教部門のリーダーを勤めました。ホーリネス教会からサポートを受けた未婚の女性たちが東京のスラム街で働きました。ナザレン教団の牧師、ミニー・ステイプルは、伝道集会を通して20以上の教会を建てあげました。彼女の夫があちこちに車で連れて行き、テントを組み立て、そして彼女がそのテントの中で説教したのです。数十年後、ミルドレッド・ワインクープがナザレン神学校の校長となり、夫が彼女をサポートしました。

このように、ホーリネス運動に関わる女性たちが指導者として活動したとしても、そのような宗教的な役目は、日本の文化に反するものではありませんでした。公の場では夫を立てていても、地方の家庭では、女性が多く働いていました。宗教行事を執り行ったり、職場で指導者として働いたりしていました。女性にも教育を受ける自由が与えられていました。女性たちが、アメリカ以上に国会議員に選ばれていました。戦後、一人の女性がある神道の一派を導いて非常に成功していました。それは天理教でした。キリスト教会の中でも牧師の妻たちが指導的役割を取るようになりました。1955年に、長期宣教師であったウィリアム・アクスリングが「人間の個性の価値に関するキリストの教えと女性に対する革命的な姿勢」という本を書きましたが、その本が、日本の近代化に貢献し、また、女性の解放にも大きく貢献しました。山野繁子は、キリスト教がなかったら、アジアにある族長文化について意識することはなかっただろうと信じています。この本を通して、日本の女性はアジア諸国の女性たちを見て共感するようになりました。

関係におけるホーリネス: 日本とワインクーブ

ミルドレッド・ワインクーブ(1906～1997)が日本に滞在したのは6年足らずでしたが、彼女が日本で得た経験はホーリネス運動にも影響を与える改革をもたらしました。彼女はセクト的な言語の壁を壊し、聖書理解の原点に戻り、地位的立場よりもむしろ関係的立場に基づくホーリネス神学を再構築しました。

ワインクーブはH. オートン・ワイリーに教えを受け、彼について、ノースウェストナザレンカレッジからパサデナカレッジに移り、そこで1931年に学士号を取得し、1934年に神学学士号を取得しています。彼女はワイリーの著書「キリスト教神学」の著作を手伝いました。この書物は19世紀のメソジスト神学とパーソナリズムの哲学、20世紀初頭にメソジストの間で広まっていた哲学の体系などを扱っています。ワインクーブは、卒業後、夫とともに副牧師、伝道者として奉仕しました。1940年代、ワインクーブは特に青年の集いの説教者として人気がありました。彼女はさらに学びを続け、1955年にノーザンバプテスト神学校で神学博士号を取得しました。

ワインクーブは1955年から1960年まで、オレゴン州ポートランドにあるウェスタンエバンジェリカル神学校で教え、その後1年間、韓国、台湾、香港、日本でOMSの働きで教鞭をとりました。1961年、ナザレン教会は、日本における神学教育法を再構築するように彼女に依頼しました。彼女は1961年から63年まで短期大学の学長、63年から66年までナザレン神学校の校長を務めました。1963年のレポートに彼女は次のように書いています。「日本の学校は、学生たちが考えるということの基本を身に着けるような教育を確立するためにあらゆる努力をしなければならない。教会の伝道する腕は教育という筋肉と骨によって支えられなければならない。日本で意味のある教育を行うためには、ただ単に西洋の神学を植えつけるだけではだめだ。我々は、人間の宗教的、あるいは心理学的な精神構造を理解しなければならない。日本人にとって「神」という言葉はほとんど意味をなさない。そして彼らには罪という概念が理解できない。日本人が社会の慣習に従い適応することを強調する姿勢は、彼らがキリスト教を受け入れることを難しくしている。そして、むしろ彼らは神道に結びつく。」

ワインクーブの日本での体験は、彼女の神学確立に貢献しました。また、それによって彼女は関係というものを強調するようになりました。「原罪」のような本質的な用語は、罪やホーリネスの聖書的な意味をむしろ分かりにくくさせていると彼女は信じていました。キリスト教の歴史において、原罪はしばしば人間の肉的部分と同一視されました。「原罪」は神と人間の壊れた関係というよりも、根絶するべき物としてみなされるようになりました。ジョン・ウェスレーと同様に、ワインクーブは、人間が原罪に対してでなく自分の個人的な罪に対して責任を持たなければならないと考えました。本当のウェスレー主義とは、根本的なモラルの責任を要求するキリスト教の実存主義に似ていました。

日本の進学者畑野誠一から直接的にせよ間接的にせよ影響を受けていたので、この両者の教えには似ている点がありました。ジョン・ウェスレーとキルケゴールの場合のように、京都大学の哲学者であった畑野は人間は霊的成長の中でいくつかの段階を通ると教えていました。最初の自然的段階は欲望の時です。二番目の文化的段階はエロスの時、三番目の宗教的段階はアガペーのと

きそれは、真の他者、神ご自身との交わりを意味しました。

1966年に休暇を取ったワインクープは、夫とともに日本に戻ろうと考えました。しかし、彼女はアジアでは教会が大学院レベルの教育に熱心ではないことを感じて、トレベッカ・ナザレン・カレッジで教職につきました。特に1972年に「愛の神学」を出版した後、彼女は講師としてひっぱいどこになりました。1973年にはウェスレー神学協会会長につきました。彼女の最後のキャリアは1976年から80年まででNTSでの神学教育でした。

関係の神学の目的はクリスチャンとしての霊的成長段階においてモラルの面で徹底的に関わることでした。それは、なにか魔法のような不合理な決定論的なコンセプトに反対するものでした。彼女の考えは、関係の神学が強調するのは神のイニシアティブが人間のどのような応答にも先んじていることでした。この点で彼女は、先行的恩寵の理解において自分はJ. ウェスレーに近いと信じていました。彼女が言うには、ホーリネスは、多くの霊的な決心がなされる心地よい恵みの座ではない場所で検証されるべきものです。ホーリネスは、生活の実際の場面に現れるべきものです。完全な愛は、原罪の根絶ではなく、内側が本質的にきよめられた性質です。ホーリネスは愛と切り離しては存在しません。

彼女にとっては、聖化は人の内側に神のかたちを回復し、キリストに似た者に変えて行く神と人間との継続的、倫理的、個人的な関係です。クリスチャン生活のあらゆる局面において、道徳的な決断とそれに従うことを実践しながら、聖化が本当の人間性を回復させるのです。聖化は、完全な健全性、モラルの完全さをもたらすもので、決して静かにとまった状態ではなく、動いていく道であり、いのちなのです。

ワインクープはホーリネスの聖書のメッセージや生きた体験が、強調しすぎる2つの危機的体験というものによって隠れてしまうことを恐れていました。2回の危機的体験を証しする人々が、時として、厳しく批判的な態度を取ることによって、証しの信頼性が壊れてしまいました。目標とすることは、断じて、2回目の体験そのものではなく、キリストに似た者とされることであり、完全な愛であるとワインクープは警告しています。彼女は、聖化の第二の体験を正当化するために、ペンテコステと聖霊によるバプテスマの教えも含めて、聖書のテキストをゆがめて解釈するホーリネスの説教者を批判しました。

彼女は第二の体験を否定するものではありません。彼女は、その体験をモラルの決断をすること、人間の成長、義認と聖化の区別ということに基づいて考えました。彼女にとって、全き聖化とは、しばしば困難を伴う人生のある段階で自分の自己中心性が見えたときに体験する意思的、自発的、質的なステップでした。全き聖化は意識的な決断を必要とします。

ワインクープの用語と方法論は彼女の同時代の神学者とははっきりと異なっています。批評家のJ. グライダーさえ、ホーリネスの神学者たちは、ウェスレーのオープンでダイナミックな神学を固定化しようとしたと認めており、ワインクープの「愛の神学」の中に働いているものこそが「真髓」であると賞賛しています。グライダー、リチャード・テイラー、ドナルド・メッツほか

のホーリネスの進学者たちは、ワインクープが恵みを軽視し、生まれつきの罪を否定し罪を悪い意思に限定する点においてペラギウス主義に近づいており、聖化を神への献身にしてしまっていると信じていました。

しかしホーリネス神学に与えたワインクープの影響は非常に大きいものです。たとえば、2つの広く読まれている書物「In His Likeness」と「Holiness Pilgrimage」において、ジョン・ナイトは、ホーリネスは、神からの刺激を受けた恵みと従順の動きとプロセスを引き起こし、それを包括するもので、それは回心のときから最後の栄化のときまでに及ぶと強調しています。キリストに似た姿へと成長を続けないと、ホーリネスは、止まった完全主義、密かな静寂主義、あるいは危険なアンチノミナニズムに陥ってしまいます。キリストに似た姿がホーリネスであり、キリストの姿に近づくことがホーリネスの成長です。

女性に対する力付けと説教

フィービー・パーマーからもミルドレッド・ワインクープからも「原罪」に関して明らかに異なる考え方がホーリネス運動に入り込んで来ました。原罪についてのアウグスチヌスの考え方は、罪はプライドであり、このプライドが情欲、肉欲という形で現れるというものでした。プライドを通して、人は自分を実際以上に高く評価します。プライドは自分の快楽を求めます。原罪に関するこの教えはローマカトリックにもカルバン主義にも影響を与えました。ローマカトリックにとっては、これがホーリネスと独身主義の同一視につながりました。カルバン主義では、人間は絶えず肉体によって包まれているので、この世では聖なるものになる希望はないことを意味しました。このような原罪の定義が広まったので、ホーリネス運動においても、この教えが罪に関して支配的な考えとなりました。このことから、厳格さ（たいていは女性の服装）を強調するようになり、さまざま行動の規定が作られました。

パーマーやワインクープと同様にウェスレーも、別の神学的流れ、かつてのクリソストモスやギリシャ教父にさかのぼる教えを受け継いでいました。この流れは、原罪の性質が偶像礼拝であることを強調します。幅広い意味における偶像礼拝です。プライドは偶像礼拝の現れであり、自分を偶像とするものです。

このことは女性と大いに関係があります。歴史を通じて、大部分の文化において、男性は自分のプライドや肉欲について女性よりも多くの問題を抱えています。そのために、男性の過度な自己中心の問題を扱う説教があまり女性には当てはまらないことがあります。

女性のニーズは男性のものとはほぼ反対のものとと言えます。女性は、本質的に、自分の願いよりも、自分の主人や子供や親たちの願いを優先します。毎日の生活の役割や行動において、女性はよりキリストに近いのです。時としてあまりにも犠牲を払いすぎる場合もありますが、女性の生活の中にキリストの犠牲が見られるのです。彼らの問題はプライドではありません。女性はそのような犠牲を払うことを高く評価するかも知れませんが、問題はむしろ自己評価、自分の価値観の欠如にあります。

ですから、繰り返しプライドに関するメッセージを聞いても、彼女たちにはあまり助けにはなりません。女性にとっての問題は過度なプライドよりも過度の謙遜であり、自分の価値を否定することにあるからです。それゆえに聖霊によって力を受けるというホーリネスのメッセージは女性たちにきわめて重要です。聖霊によって力を受けることは、可能なことであるだけでなく、むしろ神から女性への命令です。神は女性たちに聖なる大胆さをお与えになります。聖なることと大胆さは矛盾しません。ペテロが力を受けたように、プリスキラや初代教会のほかの女性たちも、聖霊に満たされるところでは、つねに彼女たちは力を受けて神の国のための働き人となりました。人を縛っているにはプライドではなく偶像礼拝です。自分と主イエスの間に何も入り込んではありません。主イエスの主権に挑んではなりません。女性は何に対して従うべきでしょうか。夫、家族、家、いろいろな物質、そうではありません。ホーリネスへの召命はどのようなものであれ、それはキリストの主権に対する根本的、直接的な従順を意味します。そして、自分がどこへ導かれようとも喜んでしたがっていく心を意味します。